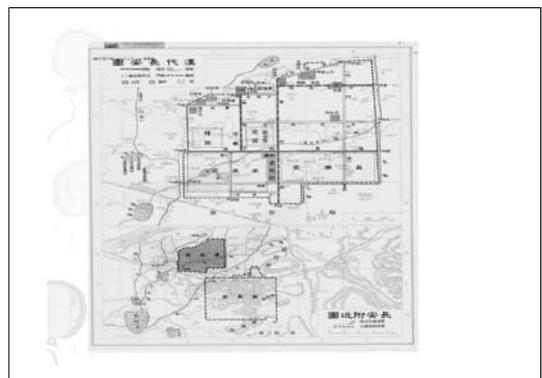
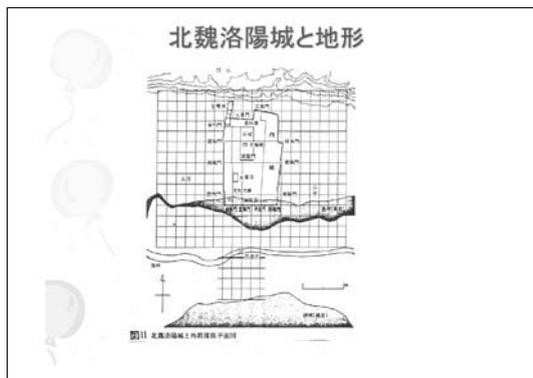
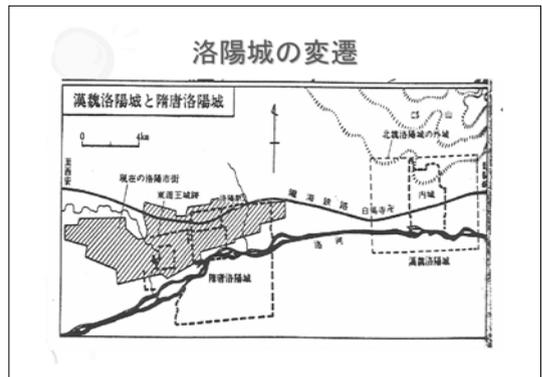
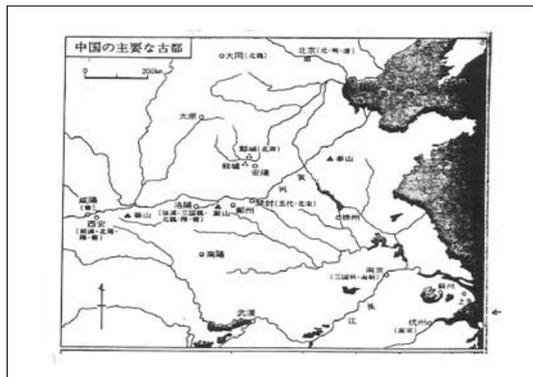
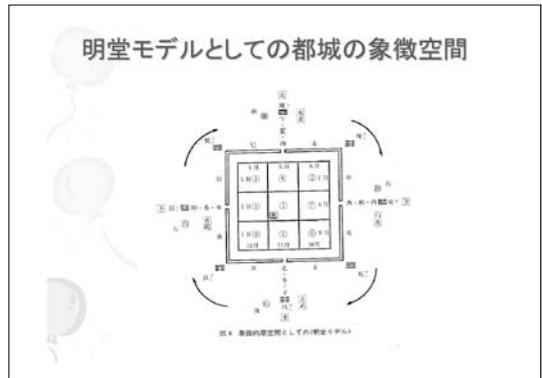
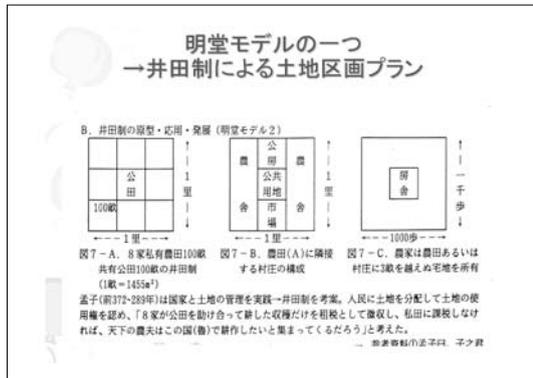


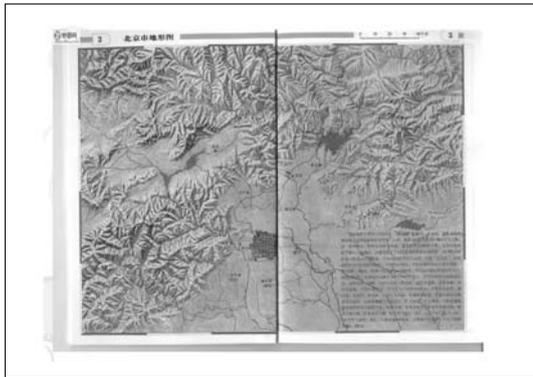
『周礼』考工記にみる都市計画 (明堂モデル)

A. 周礼・考工記による都市の創製・応用・発展 (明堂モデル1)

民	溝	民
市	市	市
民	中	民
宮	公	宮
民		民
右	左	
社	朝	

Figure 5: 『周礼』 (Spring and Autumn period) urban planning plan. The plan shows a central square (Ming Tang) with a grid of streets. The plan is divided into sections labeled A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S, T, U, V, W, X, Y, Z. A legend below the plan explains the symbols used.





風水知識の百済からの輸入と奨励

①「(推古天皇十年(602)冬十月、百済の僧観勒が来た。唐の本、天文地理の書、また遁甲[隠身]方術[陰陽、天文、医療、占ト]の書を、貢[上]した。このとき書生三、四人を選び、観勒について学習させた。陽胡史(やこのふひと)の祖の玉陳(たまふる)は、曆法を習った。大伴村主(すぐり)高聡(こうそう)は、天文遁甲を学んだ。山背臣日立(ひたて)は、方術を学んだ。みな学んでその業を成[就]した。」
山田宗睦 1992『日本書紀』中巻、教育社、284頁

②「(朱鳥あかみとり元年(686)正月)十三日、もろもろの才[芸]人、博士、陰陽師、医師、計二十余人を召して、食と禄[物]を賜った。」同上、下巻、228頁

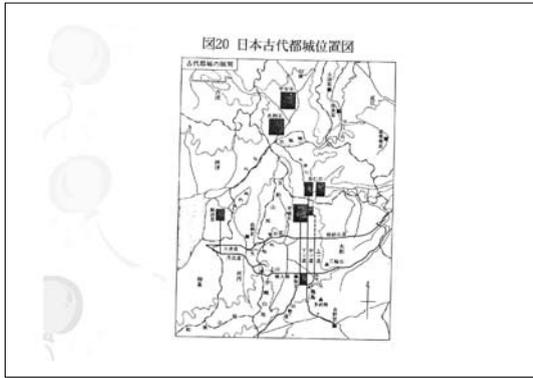
③「(朱鳥元年六月)二日、工匠、陰陽師、侍医、大唐の学生、および一、二人の宮人、計三十四人に、爵位を授けた。」同上、下巻、231頁

日本における国都造営の始まり

①「(天武十二年(683)十二月)十七日、…また詔して、「およそ都城、宮室は一か所ではない。かならず二、三[力所]を造る。それゆえ、まず難波に都を造らうと思う。そこで百寮[官]は、それぞれ[難波に]行き、家地を請え」とした。…(十三年(684)正月)二十八日、淨広肆(じようこうし:従五位下)広瀬王、小錦中[従五位上~正五位下]大伴連安麻呂、及び判官、録事、陰陽師、工匠たちを畿内に遣わし、まさに都すべき地を視、占わせた。

この日、三野王、小錦下[従五位下]采女臣筑羅(うねのみくら)らを信濃に遣わして、地形を見させた。この地に都しようとするのであろうか。

(3月)九日、天皇が京を巡行して、宮室の地を定めた。十一日、三野王らが信濃の国の[絵]図を進(たてまつ)つた。」
山田宗睦 1992『日本書紀』下巻、教育社、216~8頁



藤原京の環境判断と都造営

- ②「(朱鳥四年(689)十月)二十九日、高市皇子が、藤原の宮の[予定]地を觀た。公卿、百寮[官]が從つた。」同上、下巻、256頁
- ③「(朱鳥四年十一月)十九日、天皇が、藤原に行幸して、宮地を觀た。公卿、百寮[官]がみな從つた。」同上、下巻、257頁
- ④「(朱鳥五年(690)十月)二十七日、使者を遣わし、新益(しんやく)京[藤原京][の地]を鎮め、祭つた。」同上、下巻、261頁
- ⑤「(朱鳥六年正月)十二日、天皇が、新益(しんやく)京の[大]路を觀た。」同上、下巻、262頁
- ⑥「(朱鳥六年五月)二十六日、…新しい[藤原の]宮のこを告げた。」同上、265頁
- ⑦「(朱鳥六年六月)三十日、天皇が藤原の宮の地を觀た。」同上、266頁
- ⑧「(朱鳥七年)八月一日、藤原の宮に行幸した。」同上、271頁
- ⑨「(朱鳥八年正月)二十一日、藤原の宮に行幸した。その日に宮にもどつた。」同上、273頁
- ⑩「(朱鳥八年(693)十二月六日、藤原の宮に遷居した。」同上、276頁



平城京の環境判断と都造営

- ①「和銅元年(708年)二月戊寅(十五日)[天皇は次のように]詔した。ノ朕は福(つし)んで上玄(天)に奉(つか)え、天下に君主として臨んでおり、徳が菲薄(ひはく)にもかかわらず天皇という地位にある。[朕は]常に思つている。[宮室とは]それを作る者が苦勞し、そこに住む者が楽をしている。遷都のことは、必ずしも急がなくてよいと。ところが王公大臣はみな言ふ。

昔から近ごろに至るまで、太陽や星を觀測して[東西南北を定め]宮室の基礎を起し、治世の経綫年数をト(うら)ない土地の善惡を占ひみて、帝皇の都を建ててきた。[それにより、天子の証である]鼎(かなえ)を安定させる基礎は永久に固く、崩れぬ[天子の]業もここに在るということにならうと。

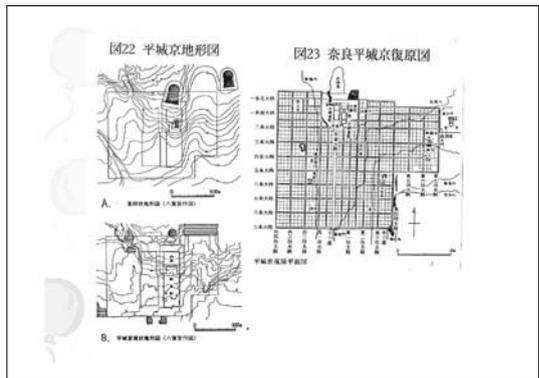
多くの臣下が難することを押さえるは困難で、その詞(ことば)も情も深く切実である。そうであるなら京師というものは、百官の府であり四海の民が集まるどころなのだから、ただ自分一人、どうして安樂であつてよからうか。いやしくもみなに利点があるのなら、それに從うべきではあるまいか。」『續日本紀』一續く

②「昔、殷の諸王は五回遷都して[国を]中興したという聞こえを受け、周の[西伯・武王・成王らの]諸天子は三たび都を定めて、太平の實れを致した。安んじて、その久安の住居を遷(うつ)さうと思ふ。

まさにいま平城(なら)の地は、[青竜・朱雀・白虎・玄武の]四つの動物が河(かた)に相応し、三つの山が鎮(しず)めをなしているところである。亀甲や筮竹(せいちく)による占ひも、ともに好い結果であつて、都邑を建てるべきである。

その造営の資材は、[それぞれ]事から従つて奉(た)げよ。また秋の收穫の終わるのを待つて、路や橋を造らせよ。人民が父母を慕(たも)つ子のように自然にやつてきて、造営を助けるという趣旨にたち、人民を苦勞させ擾(さわ)がせてはならないし、制度を妥當なものにして、後から[人民に負擔を]加えることがないよにせよ。」

『續日本紀』卷第四(元明天皇) 平凡社『續日本紀』1、重本孝次郎他訳注、99~100頁



平安京造営の経緯

「延暦十二年(783)正月甲午(15日)。大納言藤原小黒、左大辨紀古佐美等を遣はし、山背国葛野(かどの)郡宇太村之地を相せしむ。都を遷さんが為め也。

三月庚寅(12日)。五位已上及び諸司の上をして、役夫を遣り、新京宮城を築か令む。六月庚午(23日)。諸国をして新宮の諸門を造ら令む。

延暦十三年(794)六月丙子。諸国の夫五千を発して、新宮を掃はしむ。七月辛未朔。東西の市を新宮に遷し、且つは廬舎(てんしゃ)を造り、且つは市人を遷す。十月辛酉(22日)。車駕(ぎよが)新宮に遷す。

十一月丁丑(8日)。詔スラク。山勢実(まこと)に前聞(まへきこ)に合(あ)ふ。此(こ)国(こ)山河(か)襟(えり)帯(た)して、自然(しぜん)城(しろ)を作(た)す。斯(こ)の形勢(けいせい)に困(こ)り、新号(しんごう)を制(せい)す可(べ)し。宜(よろ)しく山背(やまのへ)国(こ)を改(か)め山城(やましろ)国(こ)と為(な)す。又(また)子(こ)来(き)之(の)民(たみ)[天子(てんす)の徳(とく)を慕(たも)う民(たみ)]、謳歌(うたが)之(の)聲(こゑ)、異口(いこう)同辞(どうじ)、号(ごう)して平安京(へいあんきやう)と曰(い)く。』[『日本紀略』前篇(ぜんぺん)卷(まが)13、国史(こくし)体系(てい)系(けい)所(しよ)収(く)]

平家物語(鎌倉期)の平安京描写

…桓武天皇の御宇、延暦三年十月三日の日、奈良の京春日の里より、山城国長岡に遷つて、十年と云ひし正月に、大納言藤原小黒丸(せくろまる)を遣はし、参議左大弁紀古佐美(きのこさめ)、大僧都玄慶(げんけい)等を遣(つ)かして、当国葛野郡宇多村(かどのごほりうたのむら)を見せらるゝに、商人共に笑して曰く、「この地の体(てい)を覓(た)ねるに、左青隆(させいりゆう)・石白虎(いしはくこ)・前朱雀(ぜんすわ)・後朱雀(ごすわ)・四神相伝(しじんさうでん)の地なり。最も帝都(ていと)を定むるに足れり」と申す。これによつて、遷都(てんと)の(あたりの)こほりにおはします賀茂(かもの)の大御神(おほみかみ)に、この由(よし)を告(つ)げ申(まを)させ給(たま)ひて、延暦十三年十一月二十一日、長岡(ながの)の京(きやう)よりこの京(きやう)へ遷(うつ)されて、帝王(ていおう)は三十二代、星雲(せいぐん)は三百八十歳(さんぱくじゅうはちさい)の春秋(しゆん)を送(おく)り迎(むか)ふ。それより以來(こゝかた)、代々(たいてい)の御門(みかど)・国々(くに)所々(ところ)へ、多く(おほく)の都(みやこ)を遷(うつ)されしかども、かくの如(ごと)く勝地(かち)はなしと、桓武天皇(げんぶてんてい)・こと(こと)に執(しつ)し思(おも)ひ召(め)して、大臣公卿(だいじんこうけい)諸国(しよこく)の才人(さいじん)等に仰(おほ)せて、長久(ながひさ)なるべき相(あ)とて、土(つち)にて八尺(はつせき)の人形(にんがた)を作り、鉄(てつ)の輿(こ)甲(が)の體(たい)甲(が)を(よろい)かぶとを(き)させ、同じ(おな)じ鉄(てつ)の弓矢(ゆみや)を持たせて、「来代(きよしろ)と云(い)ふとも、この京(きやう)を他国(たこく)へ遷(うつ)す事(こと)あらば、守護神(しゆごじん)ならん」と誓(ちか)ひつゝ、東山(とうざん)の麓(ふもと)に、西向(さいかう)きに立て、そ埋(う)められける。されば天下(てんか)に事(こと)出(い)で来(き)んとては、この塚(づか)必ず(かならず)鳴(な)り。將軍(しやうぐん)が塚(づか)とて今(いま)にあり。…[佐藤謙三(けんざう)注(しゆ) 1959 『平家物語(へいけいものがたり)』上巻(じやうまが)・角川文庫(かくげんぶんこ)・233頁(ぺい)]

平安京の地形と都市図

図25 京都平安京地形図



図26 京都平安京復原図



平安京の位置と古都想像図

